

しぶやとしみつ 名誉町民 澁谷壽光さんが道徳の資料に

教育委員会では、名誉町民の澁谷壽光さんの業績を子どもたちに伝えるために道徳の読み物資料を作成しました。

オリンピックを「審判」という立場で支えた澁谷さんの生き方が、現在の競技大会に受け継がれていることを知り、伝統を大切にしている心情を育てることをねらいとしています。資料の一部を掲載しましたので、ご一読ください。



問 教育課

学校教育係 ☎(83)7023
生涯学習係 ☎(83)7021

伝統や文化を受け継いで

東京オリンピックを「審判」で支えた男の思い～澁谷壽光

昭和39(1964)年の オリンピック東京大会

「やつと東京でオリンピックが開かれる。」

澁谷さんは、千葉県市川の自宅の庭から朝日に向かって叫びました。

実は、昭和15(1940)年、東京でオリンピックが開かれる予定でしたが、日中戦争が始まったために返上し、「幻のオリンピック」となっていました。それから24年、夢にまで見たオリンピックが開かれることになったのです。

しかし、それからが大変です。澁谷さんは、東京オリンピックの準備のために海外の大会を見て回り、最新の審判の技術や大会の運営の仕方を学びました。

その一方で、陸上競技の

審判員を育成するために、全国を飛び回り「審判講習会」を開催しました。12月7日は福岡、12月10日は岐阜というように…。最新の時刻表をかたわらに置き、旅行日程を決めていきました。

「審判講習会」では、国際的な大会でも通用する審判員の育成をめざし、海外で学んだことを熱心に伝えました。

澁谷さんの「第18回東京オリンピック陸上競技ハンドブック」には、次の個所に赤線が引いてあります。

○決定は唯一ひとりの人、即ち審判長にかかっている。

○審判員は、服装・動作・態度において他の規範となるべきことを自覚しなければいけない。

○歩行には、センスと教養がにじみ出るものである。

澁谷さんは、「審判は神様の代理の仕事だから、絶対に公正無私でなければならぬ」とよく話していたそうです。単に審判の技術だけではなく、人間性や精神的



審判の様子

な考え方もあわせ持った人を育成したのでした。

そして迎えた、10月10日から始まったオリンピック東京大会。各競技も順調に進み、21日には男子マラソンが行われました。国立競技場をスタートして、東京の街を走り抜け、国立競技場に戻る42・195kmも澁谷さんが中心になって決めたコースです。澁谷さんは審判団団長として、トラックでその時を待っていました。すると、胸に日の丸を付



国立競技場で円谷選手を迎える澁谷さん

けたナンバーカード77番の円谷幸吉選手が、競技場に2番目が入ってきました。割れんばかりの応援を背に、円谷選手はゴールをめざし、3位でフィニッシュ。それを見守る澁谷さんの目は潤んでいました。



最後は 会は大成功に終わりました。

10月24日の閉会式後の審判団解団式。大会にかかわった審判員や大会関係者が、澁谷さんに握手を求めてきます。澁谷さんは、その一人ひとりに「ありがとう、ありがとう」とお礼を言い、最後に万歳三唱、大会は大成功に終わりました。最後は解団式での澁谷さん 澁谷さんは次のように語っていました。「競技大会で活躍する選手を縁の下で支えている多くの人たちがいることを忘れないでください。」こうした思いが、今年開かれる東京オリンピック・パラリンピックに活かされていくことでしょう。